弘学時報

第 22 号
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

刺激と反応

学長　吉岡　利忠

この「弘学時報」第二十二号が皆さまのお手元に届くころには、少しは春の気配が感じられるでしょうか。あるいは、まだ冬の真只中でしょうか。

二〇〇五（平成十七）年度、文学部の英語・英米文学科、日本語・日本文学科第三十二回生、社会福祉学部の社会福祉学科第四回生、社会福祉学研究科第二回生の卒業を祝して一言お話し申し上げます。

四年間あるいは二年間の学生生活を終えて社会に飛び出す卒業生の皆さんには様々な試練が待っているよと、事ある度に耳にするでしょう。現代社会は、荒海だの、棘（いばら）の道だのと、決して前途揚々ではないよ、とも聞かされるでしょう。脅かされそして不安を一杯に背負って社会に出て行く、心配ですね。しかし、堂々としてください。自信を持ってください。弘前学院大学を卒業するあなた達には、それらの試練を充分に乗り越えるだけの力が自然と備わっています。学生時代に勉学・経験・体験した多くのことから、知らないうちにその能力が備わっているのです。さらに、キリスト教精神を基盤にした人格教育もそれを確かに後押ししております。学生生活とはまったく異なる生活がこれから開始されます。期待し、新たな目標を設定し、ここころ弾ませ、持っている全ての能力を駆使し、一歩一歩力強く前進する姿は美しいものです。人生の折り返しを過ぎた私たちには羨ましい光景です。ともあれ、ご卒業おめでとうございます。この数年間、あなた達をこころ温かく見守って下さり経済的な支援して頂きました保護者の皆さんには、お子様の新しい旅立ちに目を細めていらっしゃることと思います。必ずや、お子様は立派な社会人になることでしょう。

私は、「刺激と反応」という言葉が好きです。あまり聞きなれない言葉だと思います。「刺激」、これは私の勉強した生理学分野で用いられる専門用語の一つですが、その分野では、自身に降りかかるさまざまな働きかけ・負荷・刺激・ストレスなど、物理的なもの、身体的なもの、精神的なものもあれば、からだの内外を取り巻く全てのものが「刺激」となり得ます。それらの刺激が与えられることにより、わたし達の身体はそれに相応して「反応」するのです。刺激に対して決して一方的に戦うのではなく、適切に「反応」するというわけです。現代社会は、「刺激」になり得るものが数多存在しています。それらを一つ一つ受け入れ柔軟に対応して、その「刺激」を受けたことを学習し、その「反応」の仕方を身につけること、これが社会においてその個人を少しずつ大きく重厚な人間に形成していくものだと思います。思い悩むことも、心配で眠れないこと、振り返ること、多々あるでしょう。それらは、全て「反応」の仕方を身にいつける過程です。「刺激と反応」、この言葉を皆さんのどこかに置いてください。

フレッシュな卒業生の皆さん、たくさん悩み、心配し、振り返り、これからの日々を過ごして欲しいと思っております。そして、時々は、母校にお出かけください。

弘前学院聖愛中学校の復活

学校法人弘前学院
理事長・学院長　阿保　邦弘

弘前学院聖愛中学校は平成十七年十二月、三村申吾青森県知事から設置認可を受けた。設置の趣旨は、キリスト教に基づいた「生きる力」の育成を支柱に、個性を伸ばし、創造性を育てる人間尊重の教育方針のもと、柔軟で感性豊かな中学から高校までの六年間に、計画的・継続的できめ細かな一貫教育を提供するものである。この一貫教育は、中・高の垣根を取り払い、高等教育も視野に入れ、知・徳・体のバランスの取れた幅広い人間の育成に努めるものである。また中学・高校の教育課程を一本化することは、学校生活にゆとりを生み出し、新時代に対応した質の高い教育内容と私学としてのきめ細かな指導の徹底も容易になる。生徒個々の能力を引き出し、真の実力を備えた人材を育成する教育環境を提供するとともに、弘前市を中心とした津軽地域の若人に夢と希望を与え、地域振興の担い手と国際社会を舞台に羽ばたく優れた人材の養成に大きく寄与するものと確信しているところである。

三村県知事　弘前学院創立百二十年記念
表敬訪問のため来校　１月24日（火）

ところで、「聖愛中学校の復活」と題してあるが、新制中学校が発足したのは昭和二十二年四月からであった。終戦直後の混乱期にわずか数ヶ月の準備でこの大改革が実施されたので、公立の新制中学校では校舎、設備、教員の不足はいかんともしがたかった。その点、聖愛は高等女学校の低学年がそのまま中学校として成立し、教員組織も揃っていた。これにより、津軽一円の優秀な生徒が集まり最盛期の競争率は三・六倍に達し、その大部分は翌年発足した聖愛高校へと進んだ。中学校の発展隆盛は以後二十年続いた。年少時からのキリスト教教育、また英語の発音教育は、創立以来の特色であり、中学高校の一貫教育の成果は大きかった。しかし、昭和四十年代より入学者が減少し、種々の対策を試みたがいかんともしがたく、昭和五十二年に募集を停止した。

復活中学校の募集人員は一クラス三十名で二クラス六十名を予定している。大きく二つのコースに分かれ、スタンダードコースとアドバンスコースである。スタンダードコースは目標を「特技を伸ばし、好きな分野に打ち込める」とし、体育・音楽・美術の選択授業に週五時間を当て、これらの授業は、帰りのホームルーム終了後の七時間目に設定し、その後は部活動に直結できるようになっている。専門種目・分野を確立して、しっかりと磨き上げる。アドバンスコースは目標を「国公立・有名私立大学への進学を目指す」とし、主要五教科重視のカリキュラムを展開する。無理無駄のない先取り学習と七時間授業で豊富な授業時間を確保し、放課後・土曜日の講習や特別講座、習熟度別授業も用意する。授業等は中学高等学校在籍の全教員が当たり、優れた専門性を生かすことができるように配慮することにしている。弘前学院大学の学生・父母・教職員のご理解とご支援を願うものである。

２月８日（水）ジョブカフェあおもりシンポジウム2006in弘前学院大学（記事は４面）

最高裁判所長官表彰受賞

社会福祉学部長前田敏雄教授は、家事調停委員勤続三十年の功労により二〇〇五年十一月最高裁判所長官表彰を受賞されました。

看護学部のリカレント教育について

看護学部長　神郡　博

看護の領域でリカレント教育の必要性が叫ばれてから久しい。この発端は、急速な医療の拡大と発展に伴って多くの病院が深刻な看護師不足に見舞われ、その解決の方法として、中途採用者の教育の必要に迫られたことによる。

しかし、その後の医療技術の進歩は止まることなく、今の技術や知識が数年もすれば新しいものに取って代わり、絶えずそれに習熟していなければならない状況に置かれている。こうした状況から、現在の看護の職場では、絶えず新しい知識や技術の更新に向けた教育に追われている。

他方、大学は、社会の急速な変化、少子高齢化に伴う十八歳人口の減少、行財政・教育制度の見直し等をうけて、その対策に追われ、生涯教育、地域貢献等多様な新機軸を打ち出している。

本学看護学部のリカレント教育はこうした社会の趨勢を受けて、地域貢献の一環として、設置の段階から考えられてきたものである。

そして、幸いなことに、教育施設としての協力依頼の段階で、本学のこうした意図が実習施設の大方の人々の望んでいることと一致することが分かり、思いがけない早い実現に至ったものである。

一現在の看護教育の考え方とその課題―臨床と乖離しない教育の方法をめぐって―。二心電図の記録と見方―健康な人と病気の人の場合―。三傾聴としての癒しの技術―どうしたら相手の心を捉えることができるか―。四医療の中の最近の情報科学の動向。五患者と家族の意思の尊重―臓器提供をめぐる話題―。六最近の健康の考え方―健康を支援する看護のありかた―。

取敢えず、以上のような看護の最近の話題や動向を取り上げ、本学の教育に関連する県内の施設に案内した。

その結果、十三名の方から希望があり、延べ十七名が受講し、大変満足し、引き続き開催を希望する意見を頂いた。

今後はこれを基に更に地域に貢献できるリカレント教育を進めていきたいと考えている。

二〇〇五年度弘前学院大学
卒業証書授与式

文　学　部　第三十二回
社会福祉学部　第四回
大学院社会福祉学研究科修士課程　第二回

日時　二〇〇六年三月十八日（土）午前十時
場所　弘前学院大学体育館

弘前学院校友会東京支部 クリスマス礼拝及び活動

支部長　野村　洋子

初春(はつはる)に　深みと見ゆる
岩木山(やま)　ことさら今日は
美しき山かも
弘前学院大学の光り輝く
未来に乾杯🍷

昨年の創立百二十年記念式典・祝賀会に東京支部より十一名、様々な想いを胸に参加させて頂きました（四十数年ぶりの訪弘の方もおりました）。改めて歴史の尊さ、多くの方々の愛の上に、現在私達は存在しているという感謝の一言に尽きる式典でございました。柳田邦男氏の「いのちと響き合う言葉」の講演、何と素晴らしい事だったでしょう！心躍る感動を覚えました。

東京支部長のお席をお預かりいたし三年目に入りましたが、式典より学生の皆様から何よりのパワーを頂きました。感謝です!!支部長としての願いはただ一つ…それは。時代、教育背景が違う弘前学院の卒業生が一同に集い、父であり、母であり、姉妹、兄弟が理解し合える仲間の場「オアシス」でありたいと念じております。東京支部会員は旧教職員を含め、現在八百十二名。しかし、残念ながらこの会の存在を知らない方々が大勢いるでしょう（十二年前の私がそうでした）。さて、どの様な活動をしているか？東京支部最大のイベントは、クリスマス礼拝・親睦会・総会です。昨年は、十二月三日、創立百二十年記念として開催されました。本部より阿保理事長、大学より吉岡学長、神郡看護学部長、中澤主教主任、又工藤本部校友会長、長内大鰐支部長そして東京青森県人会より黒瀧副会長のご出席を頂き、支部始まって以来、華やかに且つ厳粛な礼拝が宗教主任によって執り行われました（旧職員を含めて八十五人のご出席）。親睦会は、ソプラノ歌手（阿部さとこ氏）のキャンドルサービスから始まり、会員の女流名人の日舞、「津軽弁の語り」、笑いあり、涙あり、感動あり、そして卒業生最高年齢九十歳の方のピアノ独奏「乙女の祈り」、正しく天からの贈り物のようなフィナーレでございました。大盛況だったと自負しております。校歌を忘れた失敗もございましたが、恩師の「校歌は逃げないわよ」の一言に救われました。

新年度はクリスマス礼拝の反省を含め、役員はスタートラインに立ちました。年二回の会報発行（五月・十月）、この五月に三十号発行にこぎつけます。皆様のスクールライフの原稿大歓迎!!（英語でもOK!!）

次に、青高連（青森県高校同窓連合会・大学も含む）があり、現在二十八校が加盟しており、それぞれ校風に基づく総会・校友会が開催され、役員が分担し出来うる限り出席致しております。お互い、後輩達のために「何をどう為すべきか」など情報交換の大切な場でもあるからです。母体青高連主催の「観桜会」、弘前より一足早く（三月下旬）開かれ、弘前に想いを馳せる一時でもあります。又各校対抗ボーリング大会（七月、百人位の参加者）に昨年はわが校友会より四人参加し、笑み満面のプレーでしたが、成績は？笑える結果でした。秋には紅葉の下でのバーベキュー祭り（じっちゃも、ばっちゃも家族連れ）が開かれ、県人の親睦を計り、故郷の情報・就職の情報交換・新人紹介等もあり、又先輩達の経験、体験談等若い方々には貴重なお話を聞くことの出来る場です。今年はわが校友会から是非新人を紹介したいと願っておりますが…。更に青高連の上に「東京青森県人会」というのがございます。私は理事を致しております関係上、色々な会議に出席しなければならず、日々忙しいですが、青森県出身の錚々たる方々、経営陣の講演、就職状況を把握できるチャンスでもあり、後輩達への営業の一つと考えれば、苦も又楽なりの出席です。

さて、人生は、八甲田連峰の山の如し…。その心は…、山あり、谷あり、最大の天敵大自然の恐ろしさ。大都会での生活も時として津軽の地吹雪の如く、迷路に入り込む事もあるでしょう。壁にぶつかる事もあるでしょう。そんな時、どうぞ校友会の扉を叩いて下さい。人生の大先輩達、先人達がきっと道しるべになってくれるはずです。**「たった一言」**が心を癒してくれる事でしょう。ベートーベン晩年の言葉に

「確して　有るべきか？」
「確して　有るべきだ！」

とのメッセージがあります。「トントン」ノックして下さいませ。そして、

「確して　有るべきだ！」

にして欲しいと願っております。又シェークスピアの言葉に、

結末　幸福　喜劇だと…
（学院生活大いに楽しんで欲しい。心豊かな精神と多くの足跡を百二十一年目の歴史の一歩に残してください。）
結末　不幸　悲劇だと…
（くれぐれも留年には、ご注意を!!ヨット・ボーリングに明け暮れて、危うく一年棒にふる所だった経験上…）

今年のクリスマス礼拝は、十二月二日（土）、お江戸滞在の折には是非お顔を出して下さい。勿論無料で大歓迎！

いつの日か、お会いできますことを楽しみに、支部長として努力、邁進して参ります。

最後に、みな様へ弘前学院校友会東京支部一同より、エールを送ります。

フレー！フレー！
弘前学院大学!!

教員談話室

雪やこんこん

文学部教授　中村　幸弘

「雪やこんこ」は、もと、「こんこん」でした。でも、咳をする声とも狐が鳴く声とも、まったく関係ありません。咳や鳴き声をいう「ロんロん」は、その音に擬えていった、いわゆるオノマトペです。「かんかん（と）叩く」「ガンガン（と）怒鳴る」「みんみん鳴く蝉」、そして、状況などまで、「どんどん捗(はかど)る」「ぷんぷん臭う」などというようです。

でも、「たんたん（淡々）と語る」「らんらん（爛々）と光る」の「淡々」「爛々」は漢語であって、広い意味で、外来語ということになります。「延々と続く」「燦々(さんさん)と降り注ぐ」や、四字熟語「興味津々」「自信満々」などの「ロんロん」も、漢語の「ロんロん」です。

「雪やこんこん」の「こんこん」は、「来ん来ん」で、〈雪よ、もっと降れ降れ〉の意とされています。ただ、その「来ん来ん」の「ん」が、なお、よくわかりません。蝸牛のことをいう「でんでん虫」は、「出ろ出ろ虫」ですから、ラ行音「ろ」の撥音化は、容易に理解できましょう。二対の触角を、ちょっと触ろうものなら、殻の中に頭を引っ込めてしまう、そこで、子どもたちが出ろ出ろと言う、それがかたつむりです。動詞を畳語化させた点は共通しますが、「来ん来ん」の「ん」は、何なのでしょうか。「来よ来よ」「来い来い」の「よ」か「い」が転じたものというのでしたら、意味のうえからは理解しやすいのですが、どうなのでしょうか。

それにしても、弘前で「雪やこんこん」などと言ったりしましたら、お叱りを受けることになりましょうか。今夜もまた、降り積もることになりましょう。そんなとき、「しんしんと降り積もる」といいたくなるようです。ただ、その、「しんしん」を「森々」という漢語と見るとすると、静寂なさまをいうか、派生義としても、寒さや痛みが身にしみるさまをいうのが原則です。でも、久保田万太郎『ゆく年』や幸田露伴『雪たゝき』では、雪の降るさまをいうのに、その「しんしん（と）」を用いていたのです。漢語の「森々」として用いているのでしょうか。それとも、雪の降るさまをいう副詞として、創り出されていたものなのでしょうか。

弘前学院大学 クリスマス音楽のタベ

宗教部　大坊　幹子

今年度も宗教部主催の音楽の夕べが二〇〇五年十二月十五日午後六時三十分より本学礼拝堂に於いて行われました。

この礼拝堂が建てられた記念に始めたこのコンサートも今年で早いもので六回目となりました。

昨年度から平日に音楽会を行い、学生・教職員も参加できるようにとの配慮から、全体でのクリスマス・キャンドルサービスをし、その夜に行うことになり、今年は特に忙しいスケジュールでした。

当日は日中降り続いていた雪が礼拝の終わる頃にはすっかりやみ、空には星が輝き、ライトアップされた並木道が雪に美しく生え、クリスマスの音楽会の雰囲気を盛り上げてくれていました。その効果もあってか、多くの一般の方々が足を運んで下さいました。毎年来て下さる方も増え、クリスマスのイベントとして地域に定着しつつあることを感じます。総勢二〇〇名の聴衆で礼拝堂がいっぱいになりました。

ハンドベルの軽快な曲で始まり、中澤主教主任の聖書朗読の後、今井民子氏のバイオリン独奏「もろ人こぞりて」に続き、竹佐古真希子氏によるパイプオルガンの重厚で威厳のあるその音色で一気に聴衆を魅了し、弘前ブルンネルコールのすばらしい歌声が外の風景にマッチした「冬の情景」と題した四曲を情感のこもった歌声で一部の最後を盛り上げてくれました。

休憩の後、バイオリンとフルート、ピアノによる室内楽「音楽の捧げ物」のアンサンブルの息の合った演奏に聴き入り、山田恵子氏によるソプラノ独唱は伸びやかで力強い心に響く歌声に深く感動しました。最後に再び弘前ブルンネルコールによる「メサイア」より三曲と「ハレルヤ」の合唱で荘厳な世界に引き込まれていきました。心地よい気持ての中、聴衆と出演者が一体となって「きよしこの夜」を讃美し、音楽会を終了しました。

帰り際の皆さんの満足気な顔や、「また来年も来ますから」という言葉を頂く度に、忙しい中でも回数を重ねてきてよかったと感じました。

中澤宗教主任、出演者交渉から演出演目まですべてをこなす笹森先生はじめ、宗教部学生・先生方や職員の方々、出演頂いた皆さんのご協力に感謝し、この紙面をお借りして御礼申し上げます。

願わくば、クリスマスの地域の風物詩の一つとして、また地域に開かれた大学として、音楽会を続けていけたらと思っています。

・AED（Automated External Defibrillator）とは？

看護学部　木村　紀美

AEDというのは〝自動体外式除細動器〟です。

あまり馴染みのない難しい言葉ですが、簡単に言えば突然心停止状態に陥った時、心臓に電気ショックを与えて、正常な状態に戻す医療機器です。

心臓突然死の主な原因に、心筋の動きがバラバラになり、心臓のポンプ機能が失われる心室細動があります。心室細動発生から1分ごとに救命率が7～10％下がるといわれ、いかに早く救命処置をするかが生死を分けることになります。これに対して、強い電気ショックを与えて心筋のけいれんを除去する電気的除細動は、最も効果的な方法だといわれています。

・AEDの普及

日本ではこれまで、AEDを使用できるのは医師や救急救命士に限られていましたが、二〇〇四年七月から、救命のためであれば一般市民も使えるようになりました。意識を失って倒れている人がいたら、まず一一九番に通報し、救急隊が到着するまで、心臓マッサージ、人工呼吸、そしてAEDを使った救命処置を行いましょう。

・AEDの操作

コンピューターを内蔵しているので、電極を胸に貼ると心電図を自動的に解析します。心室細動か否かを判断し、必要な時に機械が電気ショック（通電）を指示します。

音声ガイダンスに従って電極を倒れた人の胸部へ張付け、解析結果に基づいてボタンを押すだけなので操作に高度な専門知識は必要としません。

・大学への設置

本学では、一号館事務室内の棚においてあります。

入試改革で、2007(平成19)年度入試が変わります！

多様で個性ある受験生を広く募集するため、現行入試内容を大きく改めることにしました。

●**文学部・社会福祉学部**
　① 学力試験による「試験入試Ⅰ期」（2月実施）の導入
　②「センター試験利用入試B」（2回目、3月実施）の導入
●**文学部**　①「AO入試」年1回（11月実施）
●**看護学部**　①「センター試験利用入試」の導入（2月実施）

文学部・社会福祉学部

試験種別	推薦入試
	試験入試Ⅰ期
	試験入試Ⅱ期
	センター利用入試A
	センター利用入試B

看護学部

試験種別	推薦入試
	試験入試Ⅰ期
	試験入試Ⅱ期
	センター利用入試

◆入試に関するお問い合せ先
弘前学院大学　入試センター
〒036-8577 弘前市稔町13-1 TEL0172-34-5211・FAX 0172-32-9302
http://www.hirogaku-u.ac.jp E-mail:nyushi@hirogaku-u.ac.jp

新しい出会いの場・スポーツ大会

学友会執行委員長　須藤　貴子

毎年恒例となっているスポーツ大会。十一月三日と遅い時期ではありましたが、今年度も何とか無事に開催することができました。

今年度の競技は、アームレスリングを新しく企画し、卓球、バドミントン、バスケットボール、バレーボールの五種目。参加登録した学生は、約百四十名。看護学部が新設されたためか、前年度に比べ約三十名多く、たくさんの学生で体育館はにぎわいました。

どの競技も熱戦を繰り広げ、多くの学生が普段の生活では見せることのない意外な一面を大いに発揮していたように思います。珍プレーや好プレーも多数見られ、参加した学生は勿論、応援していた学生もが楽しむことができたように思います。

中でも、バレーボールは、上位になるにつれて選手の技術も本格的なものとなり、白熱した試合となりました。大勢の学生の応援や歓声もあって、まるでテレビで中継されているような試合を間近で見ている緊迫感と興奮を味わうようでした。

そのような試合を見て、最も印象的だったのは、試合終了時に選手同士が握手を交わしていたということでした。「スポーツマンシップに則り」とはよく言いますが、学生同士の握手を見て、まさにその通りだなと感じました。また、この握手は学部も学年も超えて、さまざまな学生との『出会い』の機会でもあるのかもしれないと感じました。大学では、学年が上になるにつれて、学年全体の授業が減り、少人数のゼミが多くなります。それに加え、学部や学年を越えた交流の機会は、サークルに所属していない学生にはないようで、今回のスポーツ大会で「初めて先輩と交流を持つことができてよかった」と後に行った『学生の声』アンケートにも書かれてありました。

当初は、学友会執行部役員がそろっていないということで、開催不可能だったスポーツ大会ですが、こうして開催できたことを大変嬉しく思っています。五月頃から役員が集まり、学生からも「スポーツ大会を行って欲しい」との要望と、教職員の方々の協力を得て、手探りではありながらも、何とか開催までたどりつくことが出来ました。学友会執行部だけではなく、学生と教職員の方々の協力があり、学校全体でスポーツ大会を行ったのだと思っています。

最後に、ある四年生の先輩方が「四年間連続して参加できて、とてもいい思い出になった」と話してくれました。このスポーツ大会が弘学の伝統行事として、今後も開催を続けてもらいたいと思います。

＜４ヶ月のアメリカ生活を終えて＞

英語・英米文学科３年　渡辺　知代

私はグランドホステスという仕事に就きたくて、英語力を高めるために本校と姉妹校であるアメリカの University Wisconsin Lacrosse に研修に行きました。「自分の目標に向かって頑張るぞ！」と、自分なりに勉強もし、英会話教室にも通いましたが、着いてみると、圧倒され、簡単な文の聞き取りも精一杯で、答えはただただスマイルでした。

１週間が過ぎ、寮でのルームメイトの Lisa がきました。彼女は「間違ってもいいから自分からたくさん話さないとぜんぜん上達しないよ！」と言ってくれました。そのお陰で、自分から「Hi!」と声をかけ、コミュニケーションの場を増やし、週末には友達とご飯を食べに行ったり、買い物に出かけたり、ホストファミリーとも楽しい時間を過ごすことができました。

また授業は Grammar・Speaking・Listening・Reading の４つで、中でも印象深い授業は、Speaking のクラスで、小学校に行き、日本食を紹介するプレゼンテーションをしたことでした。写真を見せて説明するだけでは、面白みがないと思い、ご飯や海苔を持って、子供たちの前でおにぎりを作って見せました。海苔の匂いに「わぁ、海の匂いがするねぇ！」と無邪気に反応していました。また、プレゼンテーションの後には日本のことをもっと知ってもらおうと、折り鶴を折って１人１人にプレゼントしたら、すごく喜んで嬉しくなりました。

更に、小学校から続けてきたクラリネットで大学のブラスバンドのオーディションを受け、コンサートに２回出場できたことも自分の成長になりました。

学校には国籍の違う様々な人たちがいて、様々な国の文化に触れ、お互い助け合い、貴重な経験ができたことを、とても嬉しく思っています。本当に自分の語学力の低さを身にしみた４ヶ月間でしたが、海外生活はもちろんのこと親元を離れて生活したのも初めてで、いろんな意味で成長できたと思います。私の為に協力を惜しまなかった学校と家族に報いるためにも、「頑張ろう！」と思っています。

お願い

国際交流委員会

国際交流委員会では六月に本学で行われる日本語集中コース（四週間）に参加するウィスコンシン大学の研修生のホームスティファミリーを募集しています。登録していただける方は総務課下山桂子までご連絡下さい。

☎〇一七二―三四―五二一一（代）

サークル紹介

ハンドベル

ハンドベルで学んだこと

社会福祉学科四年　内ヶ島陽子

私たちハンドベルクワイアの活動内容は、毎週木曜日の礼拝や学校祭での演奏、その他福祉施設やクリスマスには教会に出向いて演奏することもあります。

私たちが使っているハンドベルは、イングリッシュハンドベルと呼ばれるもので、イギリスから世界に広がった楽器です。一個一音と呼ばれるように、一つのベルからは一つの音しか出すことはできません。そのため、一人が数個のベルを担当し、メンバー個々の奏でる音が重なり合って曲を作り上げていきます。ですから誰一人欠けても、曲は完成しません。

また、曲に込められた思いをどう表現するのかを追求することも必要になってきます。

そのように考えると、私はこの四年間ベルを通して、仲間と協力することの大切さや向上心を持つことの重要さを学ぶことができたと思います。難しいことを言いましたが、ハンドベルクワイアはベルを楽しむことを第一に取り組んでいます。少しでも興味のある方は、水曜と金曜に礼拝堂で練習をしているので、ぜひ一度遊びに来てください。楽譜が読めない方でも大歓迎です。

第十五回合同書道展

社会福祉学科三年　高橋　真菜

平成十七年十二月二日から四日まで、大学合同書道展が開催されました。

大学合同展は、私たち弘前学院大学の書道部と、弘前大学の書道クラブとが協力しあい、会場を借りるところから、展示、後片付けまで行うというものです。今回で第十五回目の書道展で、今年は会場を百石町展示場で行いました。

前回の書道展より、大きな会場であったため、作品数が足りなくなるのではないかという緊張でドキドキの書道展でした。

ところで、弘前学院書道部は、現在部員が十一名です。その全員が三年生です。そのため、それぞれ授業や、実習、バイト、また他の部活もかけもちしているなどで忙しく、練習や、合同展の準備、片付け等、部員全員集まって行うことは難しかったのですが、それでも、弘前大学書道クラブの協力もあり、無事終えることができました。

また、書道部は部員の半分は書道初心者です。私は、一年の時に入部して初めて、「書道ってなんでもありなんだ！」と思いました。例えば、墨ではなく、絵の具を使ったり、過去に牛乳で書いた先輩もいました。また、紙もダンボールや、色画用紙を使ったり、自分でこんな風にやってみたい！と思うことを実際にやることができます。顧問の先生も「若いうちは、いろんなことに挑戦してみるといいよ」と、応援してくれます。

練習を重ねて、技術を磨くということも大切なことだけれども、それだけではなく、自分でどんなふうに書きたいか、イメージしながら書けるということも大切なのだということを書道部の先輩や顧問の先生方を通して学びました。

合同展や大学祭での若菜展など、これまで先輩方から受け継いできたものを、これからも大切にしてつないでいきたいと思っています。先ほど述べたように、今、書道部は三年生のみで後輩がいないので、書道に興味のある方はぜひ一緒に書道を楽しみませんか。これからも書道部をよろしくお願いします。

写真の魅力を届けたい

日本文学科三年　白石　亜矢乃

私が写真部に入部してから二年が経ちました。毎年、十一月に入ると〈弘前展を盛り上げる会〉の打合せが行われます。この『弘学時報』をご覧のみなさん、

『東北学生写真展』を知っていますか？

東北学生写真展は昨年で十五回目を迎えました。写真展は、東北地方で写真活動を行う学生からなる団体によって、秋田・青森・宮城の三県で開催されています。弘前展は十一月下旬に開催しました。今年の参加大学は東北大学、東北工業大学、宮城大学、宮城学院女子大学、秋田大学、秋田県立大学、青森大学、青森公立大学、弘前大学そして私たち弘前学院大学です。

私が写真展に参加するのは二回目になりました。写真展の準備・開催は、各県の学生が中心となって行いますが、他県の学生も開催時にはその県や会場を訪れ、学生一人ひとりの協力の下に写真展が開催されています。写真展に参加することで県内の他大学だけではなく、県外の大学生と交流することができます。また、自分と同年代の学生の作品を目にする機会を持つことで、今後の活動への良い刺激にもなります。作品の数は百点以上もあり、それぞれの個性が作品にあふれ出ています。

写真と聞いてほとんどの人が思い浮かべるのはカラー写真ではないでしょうか。しかし、写真展で展示される作品の中には、白黒の写真も多くあります。まだまだ未熟ではありますが、私は二年間、白黒写真を焼いてきました。白黒写真にはカラー写真とは違った〈深い味わい〉があります。そして、白黒写真にしかない素晴らしい魅力もあります。私は今後、『東北学生写真展』での活動を通して、展示場に足を運んでくださるたくさんの方に少しでも多く、写真の魅力を届けることができれば嬉しいです。

卒業生からのメッセージ

在学生の皆さんへ

二〇〇四年三月　日本文学科卒　佐藤　貞芳

私は昨年、北海道教員採用試験に合格し、四月から教壇に立たせて頂くことになりました。教師という職業は、教え方・接し方ひとつで子供たちの将来を左右してしまうため責任重大ですが、とてもやり甲斐のある職業です。

私は採用試験に現役で合格することができませんでしたが、教師になる夢を諦めきれず、大学卒業後東京アカデミーに入学し、一から勉強をし直しました。学習内容、そして採用試験は決して簡単なものではありませんでしたが、絶対に教師になるという強い気持ちで合格することができました。

どんな試験でも必要不可欠なものは、本当にその仕事をしたいという熱意だと思います。ですが、それを得るためには心からやりたいと思える仕事であることが前提です。その仕事さえ決まってしまえば、そこへ就職するために自ずと努力し、合格に近付きました。

今振り返ってみると、採用試験に合格できたのは私一人の力だけではありません。家族はもちろん、先生方や仲間など、多くの人の応援や支えがあったからです。大学生活とは、一つ一つの出会いを大切にし、夢に向かって充実した毎日を送ることだと思います。在学生の皆さんが弘前学院で素晴らしい大学生活を送られることを願って止みません。

私をときめかせる存在

二〇〇五年三月　社会福祉学科卒　福田　洋平

私が書と出逢い十六年。

好きだからこそ、また夢中になれるからこそ、今まで続けてこれたのだ、と素直に思う。

私は今、主に「前衛書」という分野を学び活動している。前衛書を学び始めたのは、大学二年生の時に東京銀座画廊で行われる「現代書展」に出品し、新人賞を受賞してからだ。それから四年。毎年出品し、四度目の今年最高賞である「大澤賞」を受賞することが出来た。

昨年三月、六人で卒業展「土筆展」を開催した際、弘前市在住でフラワーアレンジメントをやっている女性の方と出会った。それから花の美しさに魅了され、「花」は私の一つのモチーフとなっている。花といっても情熱的に咲くバラや聖母マリアの涙と言われている鈴蘭、と花々の美しさは色彩も異なるように様々。そんな多様な美しさを、自分なりの書風やアイディアで表現しようと取り組んでいる。

「書」を書く際に常に考え悩むのが、「いかに斬新であるか。」

私は書と向き合っている時間が心が躍り、胸がどきどきとする。まさに、私をときめかせてくれる存在だ。私にとっての書、自分そのもの。自分自身を写し出す鏡となり、自分自身を表現する舞台となる。

これから、自分の書を通して、多くの方々に書の素晴らしさや楽しさを少しでも、ひとりでも多く感じて欲しいと願うからだ。

最後に、私は生涯、書と付き合っていきたい。いや、付き合っていくだろう。自信を持って言える。書の魅力にとことん付き合っていこうではないか。

「霊」

「霜」

ジョブカフェあおもり シンポジウム2006.in弘前学院大学

二月八日(水)に県若年者就職支援センターの事業であるジョブカフェあおもりin弘前学院大学が、「夢はぬりかえていくもの」をテーマに本学体育館にて盛大に開催された。本学学生を中心に専門学校生及び高校生の約五〇〇名が参加した。

この会は、学生が企画運営を主体的に行い、若年者層の視点で意見の交換を行って、就職意識の高揚や企業における若手人材の育成を目的としたシンポジウムである。基調講演とパネルディスカッションから構成されており、実行委員長の文学部日本語・日本文学科三年の石岡千枝さんが本学生代表として「自分の夢について向かい合うきっかけになればさいわい」と挨拶して始められた。

講師・大條充能氏

基調講演では、総務コンサル・アウトソーシング会社「株式会社ゼロイン」社長の大條充能氏（弘前市出身）が「社会人のオキテ講座」を演題に、「社会人力」について自分の仕事経験を踏まえて、「迷っても立ち止まらずに前に進める社会人に」と参加者に熱いエールを送った。

続いて、参加者とパネリストがこれからの人生で職業を通して、人としての生き方あり方を全員が同じテーマで考え、意見を交わすという設定で特設ステージを会場中央に設置し、パネルディスカッションが行われた。

パネリストは、プランニングネットワーク東北理事長の中橋勇一氏をコーディネーターに、キャリアデベロップメントアドバイザーで日本マンパワーの植木千秋氏、卒業生でコラムニストの山田スイッチ氏、同じく陸奥新報社青森支社の端田裕花氏、看護学部看護学科1年米田裕亜木さんの4名にて、自分自身の経験を交えて意見の交換が行われた。

熱っぽい話合いの中でたくさんの真剣な質問が出され、パネリストで一社会人として職に就いた後に、再び看護学部に入学した米田さんが「挫折の時期もあったが、目標を持って進める今が幸せ」と印象的な意見を述べて参加者の共感を得ていた。

この記念講演とパネルディスカッションは、参加者が将来を考える動機付けとなり、意義深いシンポジウムであったことを強く確信させられた。

学内就職セミナーについて

就職課長　福井　修

二月九日(木)本学体育館にて就職セミナーが開催されました。

就職セミナーとは、学生と企業が一堂に会し情報交換をする場のことで、合同で行う企業説明会のことをいいます。自治体や新聞社などで主催するほか各大学でも主催しています。今年度初めて本学でも開催されたものです。

本学で開催する意義としては、①採用予定のある企業を本学に招き、直接就職希望の学生と面接をしてもらえる。②面接や言葉遣いの練習にもなり、コミュニケーションの取り方にも役立ちます。③学生にとっては一度に複数の企業と直接に話が聞け、また業界研究、企業研究にも役立ちます。④企業にとっても本学の学生を知る良い機会となります。⑤加えて、就職活動に対するモチベーションの高揚が図られるなど大変意義のある行事です。

当日は全国から四九社・八十名の採用担当の方の出席を頂きました。また、学生の参加は、就職活動にすでに入っている三年生一一三名とこれから就職活動するための経験となる二年生五十名の計一六三名の参加となりました。

当日は、あいにくの雪模様のため交通機関が乱れ、参加企業の約半分近くが開始に間に合わないというハプニングもありましたが、午後一時三十分、就職委員会議長今村先生の開会の言葉で始まり、畠山文学部長の挨拶のあと、セミナーの開始を待ちかねたように学生は一斉に希望の企業のブースを訪問しました。皆、事前の研究の成果を生かし、熱心に説明を聞いていました。

もっと聞きたいという学生もいたようでしたが、午後四時にセミナーは無事終了いたしました。終了後、学内のライトホールにて企業の採用担当者の方と本学の教職員とで情報交換会が開催されました。教職員からも熱心に採用情報についての質問がなされ、会は午後五時半過ぎに終了しました。

初めての開催ではありましたが、全国から四九社の参加を頂き、また、学生の参加も一六三名と関心が高く、本セミナーは成功に終ったものと総括いたします。

セミナー開催のためにご尽力いただいた関係者の方々、ご出席いただいた企業の方々に厚く御礼申し上げます。

景気は回復基調にあるものの、青森県内においてはまだ回復の端緒も見られず、就職状況は厳しいものがあります。企業の採用スタンスも依然として「量」より「質」重視の厳選採用傾向に変わりありません。きちんとした就職活動の心構え、対応が求められております。そのため、来年度以降も就職セミナーは開催する予定です。皆さんの参加をお待ちしています。

弘学から発信する 地域の学問

地域総合文化研究所所長　笹森　建英

津軽の切支丹の実態については、誰しもが強い関心をもっています。十月九日の講演会で日本女子大学村井早苗教授が詳しく解説してくれました。その書き起こし文が『地域学　四巻』に掲載されます。中村幸弘本学大学院文学研究科教授の「地名考」、福士寿一本学非常勤講師の「鳥居の鬼」など、地域の理解には欠かせない多くの研究が四巻に収録されます。

『地域学　三巻』(全二二八頁。二〇〇五年六月刊行)は順調に販売されています。以前にもお知らせしたとおり、内容は陸羯南、サルケ、能舞、幼児教育、方言、津軽三味線などです。

津軽三味線のインタビューは「山唄」を経営していた山田千里氏の活動に対する外国人（J・N・ウェスタホーベン氏）の目から見た評価であり、私たちが気付かなかった多くの事柄が明らかにされています。

陸羯南は引き続き四巻でも取り上げます。

J.N.ウェスタホーベン氏

リカレント教育の勧め

弘前学院大学大学院
文学研究科一年　福士　りか

昨年四月から弘前学院大学大学院文学研究科一期生として学んでいる。いまようやく一年を終えようとしているが、振り返ると非常に充実した時間であったように思う。

すでに大学を卒業して二十余年。高校の国語科教員として、あるいは短歌実作者として文学に接する機会がなかったわけではない。しかし専門性が高いかと言えば自信はなく、教えることに力を注ぐためにももう一度学びたいと考え始めていた。

また、そのころ同時に青森県教育委員会の生涯学習審議委員を務めており、「キャリアアップ」、その一環としての「リカレント教育」等のテーマに基づいて審議を続ける中で、それが自分の問題として大きくなっていったのも大学院入学のきっかけとなった。

但し「リカレント教育」といっても、働きながら学ぶというのは容易なことではない。私の場合は幸いなことに職場の理解が得られたが、それでも通常勤務の傍ら学ぶのは、時にひどく負担に感じられることもあった。しかし、大学院側の配慮によって大方の講義が夜間あるいは土曜日に開講されたために、一年で多くの単位を修得することができたのである。社会人が無理なく勉強できるように教授陣も親身に相談にのって下さり、仕事の都合で出席できない場合には、他の院生が細やかにサポートしてくれたことも有り難いことだった。

しかし、本当に大変なのは修士論文に本格的に取り組むこれからの一年だろう。不安も大きいが、支えて下さる方々に恥ずかしくない成果を残したいと考えている。そしてまた次年度以降も、地域に根ざした大学院で多くの方が学んで下さるよう願っている。

弘前学院大学出身者 教職員の会の設立

この組織の設立の趣旨と組織について述べます。

卒業生たちがお互いに情報を交換し合い、さらに在学中と同じ雰囲気で和やかに楽しく大学と交流を深めることを趣旨として会を設立しました。会員：弘前学院大学の卒業生で幼稚園・学校の現職の教職員、またかつて教職に携わった者。

組織

顧問：阿保邦弘（理事長）
吉岡利忠（学長）
会長：直井芙美
副会長：大和田文子
その他未定
書記：太田菜穂子
その他未定
事務局長：畠山篤(文学部長)、
局員　笹森建英（大学院教授）、佐藤和博(英文科科長)、坂本光子(文学部事務職員)

組織陣容は右のとおりです。副会長としてさらに英文関係などの人選を進めています。

会費は今のところは徴収せず、会を催した度に必要であれば、その経費を出し合うことにしました。「弘学時報」に毎回スペースを頂いて、学問・教育などに関する情報を自由に提供し合うことから始めようと考えています。皆さんで特色ある会に育て上げましょう。

（事務局　笹森　建英）

『弘前学院大学出身者、教職員の会』の立ち上げに向けて

常盤野小・中学校校長　直井　芙美

今年はとくに大雪で、どこでも難儀しております。私の勤務する常盤野小・中学校は岩木山の中腹にあるので、ことさら苦労しております。みなさんの勤務校の状況はいかがでしょうか。

「弘前学院大学（その前進の短期大学を含む）出身者で津軽地区の学校に勤務する教職員が、互いに情報を交換しあい、母校と交流を深めてもらうために、標記の会を立ち上げたい。ついては、この会の会長職に就いてほしい。実務は事務局がします」。この趣旨を携え、母校の畠山篤・笹森建英両先生が、私の勤務校に訪ねて来られました。

本務のほかに、昨今の市町村の合併にともなう学校統合の仕事にも忙殺され、その任でない、と私は強くお断りしました。しかし、両先生の情熱と設立の趣旨にほだされ、事務局とみなさんの力を頼りにしてこの会の設立の先に立つことを承諾してしまいました。大してお役に立てないかもしれませんが、よろしくお願い申し上げます。

津軽地区には、弘前学院大学出身の教職員が大勢おります。その内訳は、小学校に約三〇名強、中学校に約一二〇名弱、高校に約六〇名弱、特殊教育諸学校に二〇名弱、合計約二三〇名おります。この人数は津軽地区の教育界では決して少ないものではなく、確固たるパーセンテージを占めております。なお、ちなみに申し添えておきますが、県内の弘前学院大学出身の教職員は約四〇〇名おります。

取り敢えず事務局と緊密に連絡を取り合って準備会を立ち上げ、次いで設立総会を開き、この会の活動を軌道に乗せたい、と考えております。この会の設立に向けたご意見や企画がありましたら、私や事務局の方にお気軽にお知らせください。できることは少しでも取り上げ、実現していきたい、と考えております。

当分はこの『弘学時報』を通じて情報をお知らせします。